

# あの頃・あの方・この言葉

## ～ 日本デザイン黎明期における先駆者の声 ～

### vol.2 小池 岩太郎 氏

#### 文明の手違い

(1965年12月 大阪デザインハウスニュース No.4 より)



小池 岩太郎 氏 (1913-1992) =元東京芸術大学教授・元JIDA理事長  
インダストリアルデザイナー。大正2年東京生まれ。福岡県庁や商工省の工芸指導所  
を経て、1947年から東京芸術大学で助教授、教授を歴任。毎日ID賞審査員、  
毎日産業デザイン賞選考委員など多くの賞の選考に携わる。1992年7月逝去。

写真：新しいデザインの見かた 教材社 1963年初版 より

#### 文明の手違い

the mistake of the civilization

手動の道具に代って、機械による道具が生れはじめた時、人々はそのむくつけき姿に憎悪を感じた。美の標準が、人文的なものに置かれていたその時代、人々はこの新しい形の出現を実に抵抗多いものと感じた筈である。しかしやがて人々はその機械や機械によって生産される物にも新しい美の可能性があると思いはじめた時、実はインダストリアル・デザインの芽生えがあるのだが……。以来IDはその美の可能性を追い、それを実現してきた筈のものであった。

それが、今日、ここに来て、人間不在を来たしている、来たしつつあるというのは少しおかしな結果だと思えるのであるが、そこに科学、技術の進行ぶりと、人間状態の追求ぶりとに思い違いか、手違いアンバランスがあったのだと知らされるのである。

人間性を楯にとりながら、叫びつづけてきたIDであったが、実は科学、急速な進行ぶりに追まわられて、全体の意味を失い勝ちにやっどこさ応急の措置だけで対応してきたその結果なのだろう。それらの品々は大量生産、大量販売の波に乗って、あれよあれよという間に大衆生活の中に普及していた。それは又とめどもなく新品種、新スタイルの追い打ちで生活は嚴重にも、科学技術とデザインの恩恵らしき重い波をかぶっていったのである。

さらに悪条件は……特に日本などの場合に多いと思われるのだが……それら新しいマスプロ製品に対し受け入れ側に主体的な選択、あるいは拒否の態度の欠除が挙げられる。それに或る封建的な態度だともいえるのだが、長い間の上からのお達しで動くという生活の習性、そこには、自分で自分なりの生活の態度を律することの不得手な精神が未だ多く残っていることに起因する。このように素朴ともいえる態度に、マスコミはあたかも、お上のお達しであるかのように、それが大衆生活を引きずっていった。こうして、何もかもと抱えこむ姿は、丁度原始人が、何かの都合で手に入れた、布類や雑器類までそれらは互いに統一ないものを何でも身につけて得々としている姿に似ているようだ。冷蔵庫、ステレオ、テレビ、写真機、自動車、何でも物珍しさにつられ、マスコミにあおられて体にぶら下げて身動き出来なく

なっている現代文明原始の姿が目浮かぶ。

不思議なことに、ほんの近い処を車で行き来しているような人たちが、こんなに車が多くてはどうしようもないと嘆いており、テレビ、ラジオを幾台も家に置きながら、何処に行ってもテレビの氾濫で面白くもないとつぶやいていたりするのである。

私は、その有様を悲観するものではない。それは人間の知恵の過程としてやむを得ない面白さと感じている。今ではもっともっと、その状態が緊迫し、文明機器をこれ以上ぶら下げようにも、自らが、ぶつつぶれるよりほかないところまで行きつくより仕方ないのではないかと思う。今にもぶつつぶれそうな文明機器の重圧、それが人間不在ということであり、人間の危機ということであろう。

今日、人間の回復を叫んでいることは、このような桎梏を脱して人間がこれらを統御し人間の為に科学、技術を使いこなしていこうとするところにある。科学と技術は人間社会の進歩に欠くことの出来ない要素であるが、それはあくまで要素であって、それが人間社会に役するか否かは、あくまで人間側の主体にかかるその生かし方次第にある。

ここで、私たちは再び手違いを起こさないために、人間回復に立ち向かう覚悟を前にして今日人間不在といわれる姿は、具体的にどんな場面に、どのようにあるのかを充分見極めて処さねばならない。人間不在を単に観念の遊戯としておいてはならないのである。

物と物との間に調和を欠いていること、そのことは環境をばらばらにしていること。或る物の機能状態は他物との間に全く無関係であるか、不揃いを来たしていること。或る物の機能、使い勝手に対して生活技術上の扱い方、すなわちルール、作法が伴っていないこと、従って、さらに複数になって、生活の秩序を乱しあっていること、等々、いくつかの結果及び事例は挙げられてくる。これらは人間から何を奪っていったのか、それはどのようにして取りもどすことが出来るのか、或いは埋め合わせことが出来るのか。このようなことについての筋道だった施策が行われねばならないであろう。

私たちが、ここで確かめておきたいことは、人間不在をいい、人間の環境をこそと願うそのイメージを、中世的なものへの郷愁として捉えてはいないか、ということである。人口の増大、社会機構、組織の複雑高度化による現代運営の実体は、そのような郷愁を全くいわれないものとするだろう。私たちは現代運営の実体の中でさらにそれを有機的に高度化するその角度から、人間、自然、社会の関係を創造的に再組織し科学技術時代に於けるこの原始状況を寸刻も早く脱出せしめなければならない。



(原文まま掲載)